

## 5) ヤナギ植栽のための苗木作製法

金辻宏明

【背景】近年、琵琶湖湖岸の自然環境は人為的な改変等によって大きく変化し、幼魚期の成長をヨシ帯に依存していた多くの在来魚の生息数は減少している。その原因はヨシ群落等の衰退や肉食性外来魚の増加が主因であると推察されるが、その他の環境要因として産卵場所の減少や稚魚の生育環境の悪化も考えなければならない。

さて、琵琶湖での温水性魚類の産卵は一般的にヨシ群落が重要であるが、右の写真1～2に示すようにヤナギの根に生む魚種も多い。しかしながら、琵琶湖沿岸に生育するヤナギ類は湖岸の開発等によって減少している。したがって、ヤナギ類を増やすことは魚類の産卵場所を増やすことになる。

【目的】これら背景から、本研究ではヤナギの根に産卵する魚類資源を回復させる一環としてカワヤナギおよびアカメヤナギ(ヤマネコヤナギとネコヤナギの雑種)を植栽するための苗木の開発を試みた。

【方法】供試苗は琵琶湖湖岸で採取したカワヤナギおよびアカメヤナギの枝とし、図1に示すように整形して用いた。供試苗は図2および3に示すよう

に素焼きのポットに底から礫、腐葉土、川砂の順で詰めたものに挿し木した。挿し木したポット苗は図4(設置1ヶ月後)に示すようにポット部分を水中に没して通水させ、日光のよく当たるところに配置して育成した。挿し木の育成は平成13年4月24日から6ヶ月間行った。

【結果】カワヤナギの供試苗を挿し木し、1ヶ月経過したポット苗の状態は図4および5に示すとおりである。すなわち、1ヶ月で挿し木から発根が認められ、この時点で苗として用いることは可能であると判断された。しかし、発根状況から水位変動の激しい場所や風波の強いところへの植栽にはさらに根の成長による安定が必要ではないかと推察された。また6ヶ月後(図6)には非常に多くの根がポット上に認められた。今回用いた植栽用ポットは小さかったことから根がポットの外に向けて大きく張り出していたため、長くとも6ヶ月で風波に耐えられる根張りをすると推察された。なお、アカメヤナギについても発根状況は同様の結果であった。

このことからヤナギを植栽するための苗木を作製する場合、枝を挿し木することが有効と考えられた。また1ヶ月育成したポット苗を風波の強い湖岸に植栽するには繊維マット上に挿し木し、マットを固定して植栽する等の新たな技術開発が必要であると推察された。



写真1 能登川町栗見出在家で生育するカワヤナギの根



写真2 魚類の産卵が認められるカワヤナギの根



図1 本研究で使したカワヤナギの苗木

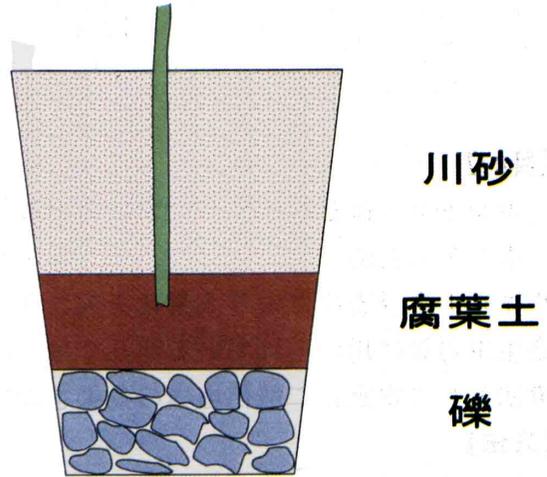


図2 挿し木植栽用ポットの断面図



図3 カワヤナギを挿し木した状態



図4 カワヤナギの挿し木1ヶ月後の状態



図5 カワヤナギの挿し木1ヶ月後の発根状況



図6 カワヤナギの挿し木6ヶ月後の発根状況